

2010年エビ類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数 量						価 格						
	輸 入			東京		家計消費 生 (㊦)	在 庫	輸 入			東京		消費支出 生 (円)
活	化比 [㊧]	冷比 [㊨]	生車	冷輸入	活			化比 [㊧]	冷比 [㊨]	生車	冷輸入		
21	0.8	3.6	198.3	0.5	12.7	2,112	64.2	3,517	1,732	822	4,446	1,221	3,615
22	0.6	3.9	205.8	0.5	12.3	1,966	59.7	4,440	2,001	829	4,283	1,197	3,339
%	71	109	104	101	97	93	93	126	116	101	96	98	92

年	輸 入 国 (冷エビ類)													調整品
	中 国	ミヤ ン マ	ベ ト ナム	タ イ	フィ リ ピン	インド ネシア	インド	グリー ン ランド	オース トラリア	カナ ダ	イタ リヤ	ロシア	アルゼ ン チン	
21	14.9	6.7	39.9	32.1	3.9	34.8	24.3	6.5	2.0	7.2	0.8	7.1	3.6	41.1
22	13.8	5.9	40.5	37.7	3.5	32.0	28.3	5.0	2.1	7.1	0.7	7.9	4.9	46.6
%	93	88	101	117	88	92	117	77	104	98	86	111	138	113

輸 入 の 動 向

22年の冷凍エビの輸入量は、20.6万トンでほぼ前年（19.8万トン）並みであった。

世界のエビ生産の既に60%以上を占め、世界的にブラックタイガー（BT）やホワイトを需要面についても凌駕するようになったバナメイは、アジア地区を中心として、その生産規模の拡大もあって、その優位性が更に顕著になっている。特に大手量販店が、バナメイに切り替えつつあり、BTの扱いが少なくなっているなど、生産現場、小売り現場での変容も著しい。

冷凍エビ輸入価格は、829円でほぼ前年（822円）並みで推移し、8年続きで三桁（一昨年までは900円台）の価格となった。

22年の為替相場（対USドル）は、上半期と下半期では大きな変化がみられ、年初1月から6月までは4月の93円台を除き90-91円台で推移した。しかし7月以降円は急騰し90円を割ってからは87円、8月85円、9月84円、10月には81円台まで進み12月に83円台に戻したものの下半期における基本的な円高傾向は変わらなかった。

主要輸入国は、引続きベトナムが4.1万トン（前年：4万トン）でトップを維持し、次にタイが3.7万トン（前年：3.2万トン）と躍進し、インドネシア3.2万トン（前年：3.5万トン）であった。続いて、インドが2.8万トン（前年：2.4万トン）と順位は変わらず、また中国は1.4万トン（前年：1.5万トン）と引続き減らしている。

また、赤エビは刺身需要も安定・定着しているが、カナダとグリーンランドがそれぞれ7.1千トン（前年：7.2千トン）、5千トン（前年：6.5千トン）とカナダが横ばい、グリーンランドが減少となった。ロシアは7.9千で前年（7.1千トン）をやや上回った。

また、近年製品需要も若干停滞気味になっていた調整品の輸入量は4.7万トンで前年の4.1万トンを上回り、やや回復した。寿司エビや尾付きエビ、ボイル、フライ等の衣付き関係はタイ2.4万トン（前年：2.1万トン）や、ベトナム1.1万トン（前年：1万トン）、インドネシア5.8千トン（前年：4.4千トン）、中国6千トン（前年：6千トン）で本年は各国ともやや増加傾向が顕著であった。

在 庫 量

本年の在庫量は、6万トンと前年(6.4万トン)を下回った。

本年は輸入量が前年をやや上回ったものの、末端消費は価格帯の低いバナメイ中心に消費が移っており、その結果が反映されたものである。

本年の冷凍エビ在庫は前年末の6.2万トンの極めて低い水準から出発し、昨年あたりから顕著になった在庫水準の低さが恒常的になっており、上半期を通じて月末在庫は5万トン台を記録した。しかも、昨年からの搬入の減少傾向は止まり、今年は一層の為替円高もあって、冷凍エビの輸入量は前年を若干上回る水準であった。その結果越年在庫は、6.3万トンとほぼ前年並みであった。

消費地入荷量と価格

22年の東京消費地における冷凍エビ類の入荷量は、1.2万トンで前年(1.3万トン)を若干下回り、依然漸減傾向が続いている。

本年の東京消費地価格は、1,197円で前年(1,221円)をやや下回ったが、ほぼ輸入価格を反映した格好となった。

本年のエビを巡る特徴は、①本年は周年を通じて為替円高傾向が一層顕著で、国内搬入環境が続いたこと、②アジアの産地価格は前年とは違って浜高に触れ養殖BT、インドネシア物(16-20サイズ)が14ドル/kgを越え、ベトナム物も15ドル台を伺うなど高騰し、メキシコ湾原油流出事故の影響が尾を引いた1年となった、③国内的には業務筋での売れ口の悪さは依然続いたが、円高還元セール等の動きは昨年以上に活発になったこともあって、末端消費はバナメイ中心に順調に進んだ、④その結果、家計消費も数量、金額ベースとも前年を下回ったが、これはバナメイ主体の商戦に切り替わったことが影響している、④浜高の影響で逆ザヤ状態は常態化しており、インポーターも円高とというものの買いにくい状況の中新年度を迎えた、ことなどである。